第56号 崋山会報
令和8年4月11日
公益財団法人崋山会

四州真景図と「素描的な日本絵画」

山口県立美術館副館長 荏開津通彦

崋山の作品の中でも「四州真景図」（重要文化財、個人蔵）はもっとも人気のあるもののうちの一つだろう。比較文学者の芳賀徹氏（一九三一～二〇二〇）はこの作品を愛して、著書『渡辺崋山 優しい旅人』（淡交社、一九七四年）で大きく取り上げ、またモノグラフ『平凡社ギャラリー22崋山 四州真景』（平凡社、一九七四年）をも著した。芳賀氏の著書刊行と同年に美術史家の鈴木進氏（一九一一～二〇〇八）監修による原寸原色の復刻本『渡辺崋山真景・写生帖集成』の第一輯「四州真景」が制作刊行され、さらに翌昭和五十年の六月には、美術雑誌『古美術』四十八号が「特集 渡辺崋山 四州真景」を組み、同図をほぼ全巻について紹介している。近年では、本会報に中神昌秀氏が十三回にわたる連載で新研究を発表されている。中神氏連載の第七回から第十回までの四回は、「四州真景図」のうちとくに名品とされる作品の分析に当てられ、「潮来花柳」「利刀 常州 十里」「新町大手 町奉行やしき」「釜原」の四図を取り上げて詳説する。「潮来花柳」と「釜原」の二図は前述の芳賀徹氏もとくに推賞する作品であった。また「新町大手 町奉行やしき」は、崋山研究の大家菅沼貞三氏（一九〇〇～一九九三）が、「就中出色のものは、滑川の景致と新町大手の実景とであろう」と述べるように、早くから名声が高かった（「崋山の四州真景」『美術研究』第百二十号、一九四一年）。

さて、「四州真景図」の魅力は、これらの図が、必ずしも絵画作品としての完成をあらかじめ予想して制作されたものではない、素描的スケッチであるという性格に由来すると言ってよいだろう。本作品の画面を通して鑑賞者は、旅行中に眼前の風景を紙上に写し取ろうとする崋山の手の動きの跡をじかに感じ、さらに手を動かす崋山の神経の働きをも直感することができるのである。日本絵画史において類似の成立経緯をもつ作品としては、まず雪舟等楊（一四二〇～一五〇二？）の「天橋立図」（国宝、京都国立博物館蔵）を挙げることができる。「天橋立図」は、最晩年の文亀元年（一五〇一）頃に、おそらくは何らかの政治的な使命を帯びて丹後天橋立に旅した雪舟が、実地でのスケッチを元に再構成した図である。彩色や紙継ぎの状態から、完成作ではない大下絵と考えられている。江戸時代初期に、雪舟流を取り入れることによって狩野派の画風を一変したと評される狩野探幽（一六〇二～七四）には、明暦二年（一六五六）の「東海道地取図巻」（個人蔵）など、八点の風景スケッチが残されており、いずれも魅力的である。『江戸後期の新たな試み』（田原市博物館、二〇一一年）において紹介された立原杏所（一七八五～一八四〇）の「遊歴図巻」（茨城県立歴史館蔵）の青緑色の美しさも忘れがたい。いつかこうした「素描的な日本絵画」を集めた展覧会を開いてみたいと思う。

『客退紀聞』（一）

▲崋山の世界認識を示す最初の手記

研究会員　別所興一

Ⅰ「客退紀聞」の解題

原本は名古屋市在住の某氏宅に保存され、愛知県文化財に指定されている。筆者はその影印版を小澤耕一先生から借用させていただき、再考察することにした。

一頁七行の罫紙に二十五丁まで書かれた雑録で、表紙左上に「客退紀聞」、右下に崋山筆記とあり、第一丁には「雑録」という表題と「都謄子」（崋山の匿名）という署名がある。

記事の内容は、オランダの学芸辞典や西洋諸国の各国史の抄録を、天保七年（一八三六）頃に抜き書きしたものである。その翻訳文は、好義・小関三英（高野長英と共に崋山の蘭学研究を主導した。一七八七～一八三九）が担当したと思われる。

特に注目したいのは、この手記が天保七年に書かれたことである。この年は天候不順が続き、はげしい凶作・飢饉が全国的規模で発生した年で、田原藩でも減収率が約九一％に及び、領内の困窮者は一万余人と記録されている。崋山は藩主から国元で救荒の陣頭指揮を執ることを要請されたが、折悪しく重病で遠出できなかったため、用人真木定前や藩医鈴木春山を代行として派遣するとともに、藩主・国家老・中下級藩士・領民たちそれぞれに、救荒のための懇切な心得書を送付するなど、四苦八苦していた。

このような藩の非常事態宣言下で、従来の海外事情認識を一新する「客退紀聞」が書かれたのである。

Ⅱ「客退紀聞」などの典拠資料

第一に、オランダの技術・学芸一般辞典である『**ニウエンホイス**』である。正篇八冊は一八二〇～一八二九年の刊行で、補遺篇九冊は一八三三～一八四四年の刊行である。アムステルダムのルーテル派の教会の主事を務めたニウエンホイスが編纂した著書である。

第二に、オランダのプリンセン著『地理学教科書』（一八一七年刊）を小関三英が天保七年に抄訳した『**新撰地誌**』である。

第三に、『**ヲーテマンス史略――一八二四年ノ略史**』である。オランダ人のヲーテマンスが書いた西洋各国史で小関三英が翻訳したもので、記載内容は『新撰地誌』と異なっていない。この訳稿と原本は小関三英が蛮社の獄で自殺した後、幕府天文方訳員の後任になった箕作阮甫（一七九九～一八六三）に受け継がれ、新たな記事の翻訳を加えて、文久三年（一八六三）に『**ヲーデマンス氏世界大国年代記全書**』という表題で訳稿が完成したという。

崋山史学研究会の元講師の吉川利明さんや会員の中村正子さんの探索・考証の尽力により、その原本は現在東京大学綜合図書館に所蔵されていることが明らかになった。その考証のようすは、「崋山会報」三十号に詳述されている。

目　次

題字「崋山会報」元崋山会理事　故小澤耕一氏
P①四州真景図と「素描的な日本絵画」　荏開津通彦
P②『客退紀聞』（一）　別所興一
P⑥『刀祢河游記』の人物画、風景画　中神昌秀
P⑩『客坐掌記』⑮　鈴木利昌
P⑫崋山塾の紹介
P⑬崋山会学童書道展
P⑭研修視察　鈴木利昌
P⑯公益財団法人崋山会田原市博物館からご案内

『ヲーデマンス氏　世界大国年代記全書』

第四に、オランダの地理学者**ルーランズゾン著『一般地名辞書』**で、正篇七冊（一八二一～二三年刊）、補遺篇四冊（一八三六～四二年刊）という構成である。崋山の日記の記事にも見られ、高野長英が翻訳したという。国立国会図書館所蔵の「渡辺崋山旧蔵書」に収蔵されている。

第五に、長崎のオランダ商館長ニーマンに関する**オランダ通詞楢林鉄之助からの聞き書きや「記蝴礒子」**と題した清国の砲術に関する漢文記事などである。

Ⅲ　『客退紀聞』本文の注釈文

できるだけ原文の真意や体裁が損なわれないように努めたが、スペースの都合で簡略化した個所もある。分かりにくい語句や地名・人名は、（　）を付けて注記した。

また、原文の要旨をより深く理解できるよう、筆者の観点から［　］をつけて時代背景となる史実などを補った。

ニウエンホイス（オランダの技術・学芸一般辞典）によれば、乾隆帝（清朝の六代皇帝）の時代にブリタニア（イギリス）国王から支那（中国）国王に使節があった。思うに『支那使節記』四巻はイギリス人の某氏の著述したもので、近年の使節による大いなる出来事である。天文地理物産医学などの大学者をヨーロッパ全土からスカウトして編纂に従事させ、この書が完成したという。

［イギリスの使節マカートニーが、一七九三年に乾隆帝と会見し、貿易拡大を申し入れたが、拒否されて帰国したという経緯があった］

この時期に広東（広州）の交易は総計すると、イギリス船八十艘、交易する場所では茶四千五百万ポンド、砂糖一千六百万ポンド、南京木綿二万千反、その他、陶器、水銀、蓬沙、漆器など、列挙すると数えきれないほどである。イギリスから輸入されて交易された品物としては、米二千六百万ポンド、その他に西洋諸製品、楽器など数えきれない。

『広東は中国南部の貿易港で、一七五七年以降の外国貿易は、この一港に限定されていた』

○楢林鉄之助（長崎蘭館通詞）の言によれば、このたび渡来の甲比丹（長崎出島のオランダ商館長）のニーマンは、年齢は四十歳くらい、学文精博でたいへん勤勉である。オランダのアムステルダムの人で、十六歳の時に軍艦の書記になった。この書記という役職は、わが国の勘定役のような任務も兼務していたことから、官位を昇りつめ、今や甲比丹に就任したという。

アラビア、アメリカ、アジアなどの諸国を渡り歩き、日本からの帰途はインドから陸路で本国に戻る心づもりという。その学識の長ずるところは、時務、航海術、天文地理で、自ら研究もしている。

○ニーマンの言によれば、リュス国（ロシア）は、イギリスと国風が異なり、信義を重んじている。それ故、信義に基づいて天下を取り、みだりに挙兵することはない。しかし、進撃した場合には退却することはなく、守備で敗れることもない。西洋の強敵国といえる。

一方、イギリスは、義とか不義を不問に付し、みだりに外国に侵入し、乱暴狼藉を果たす。国法も強いてそれを戒めていない。しかし、国法がこれを許可している訳ではない。

文化年間に起こった長崎乱暴の一件は、イギリス本国においてもその罪状が糾弾され、船長の某はその職を解任された。しかし、貴族の生まれのため、今は高官に復帰しているという。

［文化五年（一八〇八）にイギリス軍艦フェートン号が長崎港に不法侵入し、オランダ商館員を捕らえ、食

糧・薪水を奪う事件が起こった」

およそイギリスの国風は、他国の隙を窺って乱暴に及び、万一勝って貨財を利殖する時は、その義不義を不問に付してその功績を賞美することから、イギリスの国風は、他国と大いに異なると言えよう。

○台湾は以前にオランダ人が発見して、拠点としていた。しかし、明朝末期に国姓爺のために駆逐され、捨て去ることになった。最近、オランダ国王が、大義を唱え、台湾を取り戻そうとした。しかし、出鼻をくじくように国姓爺に奪い取られただけでなく、その後起こった清朝の領地になった。それ故、清朝に対し恨みがないわけではないが、大義は攻め取るものではないと考え、今はボルネオを開拓し、ここを拠点にするようになったという。

「オランダは一六二四年に台湾に植民地支配の拠点としてゼーランディア城などを築いたが、一六六一年に鄭成功に追われ、一六八三年に清朝の支配が確立した。また、国姓爺とは、明朝再興のために戦った鄭成功をモデルとした近松門左衛門の浄瑠璃『国姓爺合戦』の主人公である」

○ボルネオは大きな島で、奥地は未開拓で、木に棲み穴で生活する者も多いという。

○新和蘭陀（オーストラリアの旧名）はイギリスに奪われ、今はオランダ人の拠点はなくなった。わずかに商館（オランダ東インド会社）が残った。ここを拠点にしてニューギニアを開拓し、オランダの領有とした。

「オランダの東南アジアやオセアニア方面への植民地化の動向を記述している」

○波羅尼亜（ポーランド）王国

アレキサンテル（ロシア皇帝アレクサンドル一世）の時、魯西亜の従属国となる。

○ホナパル（フランス皇帝ナポレオン・ボナパルト）の争乱の時、払郎察の従属国となり、勲功を立てた。ホナパルが魯西亜の捕虜になった後は、千八百十五年、スタニスラス（ポーランド最後の王）が死没し、王統が断絶し、以後ポーランドは、無主国となり、魯西亜の奉行が設置された。また、魯西亜の貴族が擁立され、議会政治が成立した。千八百三十一年、ポーランド国は滅亡した。その後の歴史は省略する。

「ヨーロッパ情勢では、ポーランド王国がナポレオン戦争前後にロシアの侵攻により悲運の歴史をたどったようすに注目したようだ」

○「ヲーテマンス史略」の千八百二十四年の目録に掲載されている国名は、次の通りである。

エジプト・アッシリア・メディア・トロイ・リディア・フェニキア・シリア・ヘルシー（アケメネス朝ペルシア）・ポンチュス（古代小アジアの王国）・カッパドキア・ギリシア・アーテネ（古代ギリシアの都市国家）・ラセテモン（スパルタ）・マセドニー（マケドニア＜アルガイダイ系の＞）・後ノマセドニー（マケドニア総督アンティパロスか）・又後ノマセドニー（マケドニア王カッサンドロスか）・タラシー（トラキ、ギリシアの北部）・ヘルナミス（ヘレニズム）・小マセドニー（アンティゴノス王家）・シーリー（シリア）・ハルチー（パルティア、アケメネス朝ペルシア）・アルメニヤ（ペルシャ北方の国）・シ、リヤ（シチリア、地中海最大の島）・カルタコー（カルタゴ、アフリカ北岸の古代都市）・ローマ帝国・第二ペルシヤ（ササン朝ペルシア）・ヲーステルセ＜帝国レーマノ末＞（東ローマ帝国）・アラヒヤ（アラビア、イスラム帝国）・トルコ（オスマン・トルコ）・モンゴル（蒙古、元朝）・第三ペルシヤ（サファービー朝ペルシア）・シナ（中国、明清朝）・ドイツランド（ドイツ、神聖ローマ帝国）・ヲンカリヤ（ハンガリー）・ホヘイメー（ボヘミア、チェコ）・プロイセ（プロシア）・ホーレン（ポーランド）・スエシヤ（スウェーデン）・デネマルヵ（デンマーク）・イギリス（イングランドか）・スコットランド（イギリス）・フランス・イスパニヤ（スペイン）・ヲランダ・イタリヤ（イタリア）・ヘネシヤ（ベネチア）・ナポルー（ナポリ）・シ、リヤ（前掲）・スイツランド（スイス）・フルエーニフテスターテンデ（アメリカ合衆国）

○ニーエンボイス（ニウエンホイス）

マロッコ国（モロッコ、アフリカ北西岸の国）は、バルバリア（蘭語、アフリカ北部の地域を指す）の中に

ある。<中略。この間にある地境を説明している> この国は千六百七十年のころ、モライアビート（イスラム王国のムラービット朝か）という国王がいて、ヘス国（フェズ、モロッコ北部の内陸都市）・シュエス国、マロッコ国、ヘレハ国（イスパニアの都市国家ヘレスか）を兼併して一国にした。現今では一万四千平方マイルの面積で、人口は四五百万人であろう。これはローマ帝国の時代にマフリタニヤ（マウレタニア、現在のモロッコとアルジェリアに当たる地域）と称した国である。その気候は温和なので、この地域内では砂漠以外の地ではいろいろな穀物が豊穣である。

この地域の港湾都市としては、サアレー、モカルト、サビシー、シントコロイクス、ラロセー、テチュワン、タンケルトス（ジブラルタル海峡に面する港湾都市）などがある。毎年ヨーロッパ人が、それらの港湾都市で若干数の穀物、羊毛、油類、ゴム、皮革、アマンテレン（アーモンド）、ターデレス（なつめやし）、銅などを交易して帰国する。なかんずくマロッコの皮革や布製の織物、革製の工芸品は、天下一品として重宝がられている。

この国の人は、自身を王と称し、西方の君主ともいう。ヨーロッパの人は、間違って皇帝の称号を与えた。しかし、それを受けても彼らは、トルコ国に臣従することを拒否した。<思うに、トルコはバルバリアの大半を領有していたからである>

この国では、国王自らが国政と宗教の権限を一手に引き受け、外国の指揮を受けなかった。国王直属の軍隊は、ネーゲル人（黒人）六千人、アラビア人六百人で、これを陸軍と呼んだ。海軍は大砲四十五坐を備えた軍艦二十四艘がある。

国民の人種構成は、モーレン人（モール<ムーア>人。アフリカ北西部の黒人のイスラム教徒）、アラビヤス人、ブレブル人（ベルベル人、北アフリカ山地の先住民族）、ネーゲル人、ヨーデン人（ユダヤ教徒）、キリステル人（キリスト教徒）などである。このキリステル人は、商法に通じ、職工などの任務を果たし、下積みの仕事に従事する者が多い。

首都はマロッコと云い、千百年代にアラビア国王が建設した。人口は一万五千人である。また、ヘス（フェズ。モロッコ中北部の都市）という所は壮麗な都市で、人口は七万人もいる。また、長さ二百間（六尺、約一、八メートル）ほどのホテルがある。アフリカ中で最も豪華な倉庫もあるという。

［アフリカの辺境のマロッコ国は、国王による政教一致の指揮により多様な人種を統合し、強力な常備軍を持ち、交易が繁盛し、独立独歩の王国として栄えている。そのようすをリアルに紹介している］

○蝴蝶子（蝶の形の砲弾）に関する漢文記事

嘉慶五年（一八〇〇）、余（私）は浙江省台州府松門衛において安南（ベトナム）の軍隊を撃破した。その際に獲得した兵器や砲はたいへんな量である。銅製の砲弾は直径四五寸の物で、円球の殻に二尺の銅線で綴じ込んだ後に溶けた鉛を注いで固めた。その威力は敵の軍船のマストを撃破するほどだったので、余はその製法を模倣した。広範囲の武備のため、かりそめながら、この珍しい話を書き留めることにした。

○露西亜帝紀（ロマノフ朝の皇帝に関する記録。ニューエンホイス所蔵）

第一世　ヘートル帝（ピョートル一世）、第二世　第一ノカタリーナ女帝（エカテリーナ一世）、第三世　第二ノヘートル帝（ピョートル二世）、第四世　アンナ女帝（アンナ女帝）、第五世　イルサベット女帝（エリザベータ女帝）、第六世　第三ノヘーテル帝（ピョートル三世）、第七世　第二ノカタリーナ女帝（エカテリーナ二世）、第八世　ポヲリ帝（パーベル一世）、第九世アレキサンデル帝（アレクサンドル一世）

○ヘートルビュルク（サンクトペテルブルク、ロシア帝国の首都）の人口統計（ヲーテマンス所蔵）

千八百十四年　三十二万五千七百十七人　千八百二十二年　五十七万人

○ヲゝステンレイキ（オーストリア）の人口　二千八百万人

『刀祢河游記』の人物画、風景画

研究会員　中神昌秀

一　『刀祢河游記』の風俗画的人物描写

文政八年（一八二五）、崋山三三歳の時、スケッチ画入り紀行文『四州真景図』（重要文化財　紙本墨画淡彩　四巻　個人蔵）が制作されます。同年、『刀祢河游記』も制作されます。

『四州真景図』のスケッチは写実的に描かれた風景画でいわゆる真景図と呼ばれるものです。それに対して『刀祢河游記』に描かれた人物は風俗画に分類されます。風俗画とは、市井の人（武士も含む）の普段の生活を描写したものです。崋山の風俗画の代表作としては、文政元年（一八一八）崋山二六歳の時の作品、『一掃百態図』があります。

『一掃百態図』紙本墨画淡彩　冊子装
26.4cm×19.5cm　田原市蔵
重要文化財：渡辺崋山関係
資料32点の一括指定のうちの一点

美術史家菅沼貞三氏は『崋山の研究』の中で「軽妙な筆端になる當世風俗の活寫に興趣の尽きぬものがある」と書いています。

崋山の風俗画の代表作は『一掃百態図』ですが、それ以外にも、雁皮紙小冊に多くの風俗画を残しています。まず雁皮紙小冊とは何かを説明し、小冊に残された風俗画について説明します。次に崋山の俳画について説明し、最後は、『刀祢河游記』正本と稿本の図の相違について解説します。

二　崋山の雁皮紙小冊と風俗画

崋山は、雁皮紙（がんぴし　沈丁花科の植物である雁皮の樹皮が原料の和紙）の小冊をいつも携行し、人物、風景、花鳥などを写生していました。小冊のサイズは、ほぼ和本の半紙本、現代のF2号のクロッキー帳位で、縦二五cm弱、横一七cm前後のものです。

文星芸術大学名誉学長の上野憲示氏は、小冊について「用途から、自らの本画の小下絵を収録した小下絵冊、各地各所で寓目した書画を記録として写し留めた過眼録、さらに今でいう純粋な写生帳と、大きく三種類に分類できる」と書いています。

上野氏の分類で「本画の小下絵」とされているものはタイトルに画稿、又は図稿の文字が使われているものが多く、それ以外のタイトルでも、画稿と思われるものが多くあります。これらの小冊の人物画などは、崋山の風俗画の系譜としても位置付けられます。

また、菅沼氏も、『崋山の研究』の中で「二十前後から三十前後に、金陵や文晁に学ぶと共に、明清の画を臨摸し、それと同時に俳画の技法を取り入れて、草體の略画を描いてきた」と述べています。

崋山が雁皮紙小冊を携行しての写生について、田原藩第八代藩主三宅康友の四男（庶子）の三宅友信（一八〇六～一八八六）は明治一四年（一八八一）、『崋山先生略伝補』の中で「先生、平生雁皮紙小冊ヲ懐ニシ、公廨ニ入ルト雖未ダ嘗テ舎テズ。或ハ行路中、或公務ニ出ル肩轎中ト雖モ、眼ニ歴ルモノアレバ、随テ摹写セザルナシ。此小本積テ幾度等身ニ至ル。」と書いています。

三　崋山の画稿帳

文政四年（一八二一）、崋山二九歳の時の作品が『辛巳（しんし）画稿縮本』（紙本淡彩　冊子装　個人蔵）です。これは、辛巳「かのと　み」の年の画稿帳です。辛巳画稿の中に崋山の末弟を写生した五郎像などがあります。

『壬午図稿』
酒井忠世　青山忠俊

文政五年（一八二二）崋山三〇歳の時の作品が『壬午（じんご）図稿』（重要美術品　紙本淡彩　冊子装　田原市蔵）です。これは、壬午「みずえ　うま」の年のものです。扇面、掛軸、屏風の下絵が収録されています。二丁表と裏には青山忠俊、酒井忠世、土井利勝の図があり、花鳥を中心に一部人物を含め、四七丁まで続きます。第一九丁表には右に「渡辺登胡月来」、という注記あり、男が座る図が描かれています。この図など風俗画の系譜の典型と言えます。

文政六年（一八二三）崋山三一歳の時の作品に『癸未（きび）画稿』（紙本淡彩　冊子装　田原市蔵）があります。表紙には題の記載がありませんが、項中に癸未の記載があり、癸未「みずのとひつじ」の年が推測されます。扇面、掛軸、襖絵、屏風の下絵が収録されていて、依頼画の画稿と思われます。

この中の布袋図は、丁寧に描かれた人物ですが、人物が全体に丸みを帯びている点など『刀祢河游記』との類似性を感じます。外にも僧衣の男性や烏帽子姿の貴人など人物を描いた風俗画があり、『刀祢河游記』の系譜にもあると言えます。

『癸未画稿』布袋図

四　『目黒詣図巻』　崋山の草筆

文政一二年（一八二九）の『目黒詣図巻』（重要美術品　紙本淡彩）は藩からの許可がでて、崋山を含む三宅家の江戸詰め藩士四人が、目黒を参詣した時の挿図入り紀行です。各場面を俳句、狂歌、短歌、漢詩により説明する形で『刀祢河游記』とは異なる風流さが有ります。上野氏は『目黒詣図巻』を「挿図入り戯文画巻である」とし「軽妙な草筆の飄々とした味わい深い戯画である。」と解説しています。なお『目黒詣図巻』原本画像については、東京文化財研究所のホームページにあります。画像は、昭和三〇年（一九五五）に撮影されたものです。

五　『桃家春帖』の崋山俳画

俳画とは、俳句を賛した簡略な絵画のことです。崋山は俳諧宗匠の第五世太白堂加藤莱石、第六世太白堂江口孤月（一七八九～一八七二）と深い交流がありました。初世太白堂の天野桃隣（一六四九～一七一九）は、天保一二年（一八四一）の『鮫洲抄』では蕉門十哲の一人とされ、孤月は、江戸蕉門の流れを汲む俳諧宗匠として活躍します。崋山は文政四年から孤月一門の春興帖（しゅんきょうじょう　年頭の挨拶の俳誌）『桃家春帖』の挿絵の版下を描いています。これは半紙本（縦二二cm横一五cm）で、約百丁（二百ページ）位あります。文政一二年版では、一一七丁（二三四ページ）あり、俳画は約一五〇点が掲載されています。また春秋に発行した俳誌『華陰稿』『月下稿』の表紙画、挿絵の版下を崋山が描いています。

六　『崋山翁俳画』と俳画の系譜

崋山が田原蟄居中、吉田藩御用達の商人　味噌醸造業の鈴木屋與兵衛（一七九二～一八五四）俳号　三岳に、俳画を指導しました。嘉永二年（一八四九）三岳は、所蔵する崋山の俳画の範画を『崋山翁俳画』（縦二八・三cm　横三一cm　和紙折本）と題して木版刷で版行します。この、第一面は崋山の俳画論で「俳諧絵は唯趣を第一義といたし候」と書かれています。第二面からは与謝蕪村などの原画をアレンジした模写が例画としてあり、崋山自身の俳画もあります。

『刀祢河游記』は、『目黒詣図巻』から弧月が主宰する『桃花春帖』の挿絵を経て、崋山没後に版行された三岳編の『崋山翁俳画』に至る俳画の系譜でもあります。

鈴木三岳編『崋山俳画譜』
朝顔図　紙本墨画淡彩
29.0cm×32.3cm
（掲載図は大正15年米山堂刊
彩色木版画 和本復刻版による）

七　『刀祢河游記』正本と稿本の図の相違

『刀祢河游記』は二つのものがあることは、崋山会報５５号の『刀祢河游記』序論で説明しました。図については、正本（錦心図譜）と稿本（芸苑叢書）はどのように異なるのでしょうか。

まず、共通点としては、どちらも風俗画に分類されます。そして、『刀祢河游記』は「盆の月いつかいでくるゝも」という文章で始まり、技巧を凝らした表現と白日夢のようなストーリーが展開していきますが、挿図も現実を踏まえた仮想空間の出来事を表現していると言えます。また俳画のような情趣あふれる図となっています。それぞれの図は、動きがあるクロッキー調でもあり、線を極力省略した柔らかな曲線です。クロッキー調の省略した曲線は風流さを増幅させています。崋山もそのような効果を意図した上でのことだと思います。またどことなく素朴さも漂います。

ところで、正本の大里本と稿本のコロタイプ版の最大の相違点は構図です。今回、構図を中心に相違点を説明します。

八　『刀祢河游記』正本と稿本の各図の対比

（一）崋山、桂麿 画を談ずる

第一は崋山と桂麿が絵画論を交わす場面です。正本の方は、向かい合って座っていますが、稿本の方は、一人は斜めに座り、紙を広げ、斜めに座った人物は、腰を深く曲げています。正面を向いている人物も顔を紙に向けていて、全体に動きがあり、構図としては、正本より優れているように見えます。また本文の「山水のあはくしづかなるぞ、あはれなりと、品さだむる」という文の「品さだむる」も稿本の方が、二人とも腰を曲げてのぞき込むように見ていて、会話が聞こえてきそうなぐらい、本文が画に表現されています。

しかし、よく見ると、正本では人物の背後にかかる掛軸と左の人物が見ている絵を対比させ、「花とりのけやけくやさしさよりは、山水のあはくしづかなるぞはれなりと品さだむる」という場面に関し、正本は本文に忠実に表現されています。

『刀祢游記巻』『錦心図譜上巻』
写真版

『崋山翁刀祢游記』
芸苑叢書

（二）三人歩行之図

第二は「三人歩行之図」です。正本も稿本も、『一掃百態図』の軽妙な筆端や動的姿態をさらに進化させています。図の中央の三人の人物は、『一掃百態図』よりさらにデフォルメされ、またクロッキー調です。左の人は指をさしていて、さりげない動作が、しっかり動きを表現しています。

三人が立っている構図はほとんど同じです。左の人は大里でしょうか。手で方向を指示している

『錦心図譜上巻』
写真版

『崋山翁刀祢游記』
芸苑叢書

ようにも見えます。違いは中央の人です。二本差しの武士風であり崋山なのでしょう。正本の方は斜めに背中を向けています。左の人が指示している方へ三人で行こうとしているようにも見えます。稿本は斜め正面を向いて、左の人が指さした方を見て、目の上に手をあて何かを眺めるようなポーズです。稿本の方が、多少、図に動きがあります。

（三）利根川対岸の景色

第三は風景画です。稿本には地名が書きこまれています。実景をスケッチしたものが下絵となっていると思われ、『四州真景図』との類似も感じられます。正本と稿本で基本の構図は似ています。

『刀祢游記巻』『錦心図譜上巻』写真版

『崋山翁刀祢游記』芸苑叢書

（四）人家屋根

対岸に見える低山というか丘があり、薄い墨で、輪郭線を使わず描いています。岸の人家や小舟は濃い墨を使い、遠近を描き分けています。稿本の小舟は、筆の面を使って点を打つように描いています。正本の舟は五艘ほどです。『刀祢游記巻』本文に「岸につなげる船は風のこの葉の集まるが如」という記述がありますが、稿本は本文に忠実に、舟が、木の葉の集まるように描かれています。

『刀祢游記巻』
『錦心図譜上巻』
写真版

正本には「利根川対岸の景色」の図のすぐ次に、屋根が連なり集落らしき景色の図が小さくあります。稿本には、この図はありません。

（五）船中三人逸興

最後は舟遊びの場面です。本文では「舟を買い、艫を解く」と言う記述がありますが、図はまさに艫を解く場面が描かれています。また、稿本のコロタイプ版は折本で、図の中央で別ページとなっており、元データがページごとの撮影のため、二分割写真を繋げたものを掲載しています。

構図は、正本と稿本では似ていますが、舟の向きが異なります。

船頭の着物は、正本より稿本の方が描き込んでありますが、正本はあえて簡略化することで、他の人物とのバランスもとれて、まとまりがよくなっています。

また船頭の棹の角度が正本では寝ているのに対し稿本では棹が立っています。船頭が操る竹棹はあえて直線にせず微妙に曲がり、一部が掠れた竹の線で、竹の質感がリアルに描かれています。特に正本は稿本より竹の特徴が強調されています。

正本の小さな川舟は、左舷船縁の湾曲が不均一でゆがみ、舷側板も薄墨を部分手的にさらに薄くし、少し波打っているように見せて、板の経年変化を巧に表現しています。

船外の上半身裸の男は正本では舳先を押さえていますが、稿本では、艫綱を手繰っています。

船中三人逸興の図は、本文でクライマックスへと続く重要な場面であり、さりげない風俗画の中に様々な技巧が駆使されています。

『刀祢游記巻』『錦心図譜上巻』写真版

『崋山翁刀祢游記』芸苑叢書

田原市博物館所蔵品から渡辺崋山筆『客坐掌記（天保九年）』⑮

第49号から続く

（図　山水）

甲午秋日古呉宗士写

王隠

○仁平　元暦

永保元田巻、造東寺印

寛弘七年十一月廿五日　圧預多紀

別当山田念啓

山田公蔵

かきはん

件寺田見作伍町伍反弐

佰捌拾捌歩任勘定受

王隠　晋　字処叔、陳郡陳（河南淮陽）人、博学多聞、元帝（三一七～三二二在位）以為著作郎、撰晋史。（中・140）

仁平　一一五一年～一一五三年

元暦　一一八四年～一一八五年

永保元　一八〇一年

田巻　未詳

東寺　教王護国寺、真言宗、京都市南区九条町、平安遷都に伴い、王城鎮護のため延暦十五年（七九六）東寺・西寺が建立された空海が真言密教の道場とした。

寛弘七年　一〇一〇年

多紀　未詳

山田念啓　未詳

山田公蔵　未詳

寺田免官物也

式部大輔兼侍従文章博士守大江卿

かきはん

丹波国印

大江系図

木工頭丹波和泉三河守文章博士式部大夫

冊正五位下　挙周*　匡房ノ祖　赤染衛門ノ子

延喜玖年漆月拾漆日秦忌寸岑殿*

貞観十五年三月廿六日医師従七位下長江祖継*

弘福寺印*

自天平三年迄宝宇二年*

景雲元年*

宝亀四年*

挙周　大江挙周（？～一〇四六）、平安中期の学者、匡衡の子、母は赤染衛門、一〇一九年和泉守、一〇二六年頃三河守、文章博士、正四位下式部大輔。（国書人名・①　３０５）

匡房　大江匡房（一〇四一～一一一一）、平安中期の学者、大江匡衡の曾孫、大江成衡の子、母は橘孝親女、式部大輔、参議、権中納言に進む、著「江談抄」（国書人名・①３０７）

赤染衛門　生没年未詳、平安中期の女流歌人、赤染時用の子、藤原道長の妻・倫子、上東門院彰子の女房に仕え、大江匡衡と結婚、挙周を生む、「栄華物語」の作者ともいわれる、著「赤染衛門集」。（国書人名・①　１５）

延喜玖年　九〇九年

漆月拾漆日　七月十七日

秦忌寸　秦中家忌寸

貞観十五年　八七三年

長江祖継　未詳

弘福寺　川原寺、奈良県高市郡明日香村川原、真言宗豊山派、仏陀山東南院、孝徳紀白雉四年（六五三）に仏菩薩像を川原寺に安置するとある、飛鳥京三大寺の一。（角川地名・㉙　３５６）

天平三年　七三一年

宝宇二年　七五八年

景雲元年　七六七年

宝亀四年　七七三年

崋山塾の紹介

～田原から未来を拓く
志の高いリーダーを育成～

崋山会では、前年度に引き続き、崋山神社奉賛会の協力の下、郷土の偉人「渡辺崋山」の遺徳を継承するため、志の高いリーダーの育成を目的に、崋山会館で崋山塾を開講しました。

8月には1期生24名の閉講式や記念講演会、塾生による政策課題研究発表会を行いました。

そして、9月には2期生25名の開講式などや、10月には記念講演会を行いました。

○第4回崋山塾　基調講演

地球環境の変化が身近な課題となっている今、研究課題に関連する脱炭素社会の実現に向けた環境エネルギー政策を研究する必要があり、5月25日の第4回崋山塾基調講演会では、（公財）地球環境戦略研究機関上席研究員として世界で活躍されている藤野純一氏から「持続可能な未来をデザインする」と題して講演いただきました。

基調講演会で講演する
藤野純一氏

この中で、直面する気候変動の現状と、持続可能な未来に向けて、果たすべき役割について、示唆に富んだ興味深いお話をいただきました。

○記念講演会

記念講演会で講演する
片山善博氏

第1期生の活動が一年を迎えた8月11日には閉講を記念して、元鳥取県知事・元総務大臣で、現在大正大学公共政策学科教授・地域構想研究所長の片山善博氏から「消滅か　再生か～岐路に立つ地域社会とリーダーの資質～」と題して講演いただきました。

その中で、人口減少を受入れ、社会を維持するために生産性を向上させること。そして、若者や女性に選ばれる地域づくりをしていくこと。地域のことを真剣に考え、実践していくこと。リーダーは、能力を活かす環境を整えることなど、地域社会を再生していく上での視点や、リーダーのあり方について、分かりやすくお話しいただきました。

○政策課題研究発表会・閉講式

その後の研究発表会では、塾生5班が1年かけて自主的に研究してきた政策（①就労支援と雇用創出②経済循環システム③働き手の創出④人財育成システム⑤新モビリティまちづくり）の提案がなされ、講師の片山先生からは、表面的な検討に留まらず、実践を見据えた具体性と、深く掘り下げられた内容であるとの高い評価をいただきました。

政策課題研究結果の発表の様子

○第2期開講式・記念講演会

9月28日には開講式を行い、崋山塾では、事務局から田原市の歩みや、田原臨海企業懇話会長の山田俊郎氏から「三河港、田原臨海の歩み」の講演がありました。

10月1日の記念講演会では、会社人生の殆どを田原工場で過ごしたトヨタ自動車㈱執行役員　生産本部長の伊村隆博氏から「未来はみんなでつくるもの～伝承される〝人中心〟のモノづくり～」と題して講演いただきました。

その中で、「OneトヨタOne田原One車体　田原の未来を自ら築く…」に表れているように、田原という地域とともに生きているという「田原愛」を感じた講演でした。

その後の塾生との懇談会では伊村隆博氏を始め、愛知県副知事の江口幸雄氏にもご参加いただき、大変、有意義な一時となりました。

今後も、政策課題に関連した講師を招聘してまいりますので、是非、聴講してください。

講演後、塾生と懇談する伊村隆博氏と江口幸雄氏

「第14回 崋山会学童書道展」入賞作品のお知らせ

公益財団法人崋山会では、郷土の偉人渡辺崋山の遺徳を学ぶ機会として、学童書道展を開催しております。田原市内の習字教室に通う小学生、中学生を対象に作品の募集をしたところ、小学生48点・中学生23点の応募がありました。応募総数71点の中から、優秀作品21点を選定し、そのうち特選作品4点をご紹介させていただきます。

ご応募いただきました皆さんやご協力をいただきました習字教室の先生方に厚くお礼申し上げます。

公益財団法人崋山会

特選

低学年の部

入選

鈴木しゅか（三年）

奨励賞

青木　昊（二年）　小久保侑孝（二年）

高学年の部

入選

住友　華（五年）　豊岡　由菜（五年）

藤田　虹春（六年）　遠藤　百華（六年）

木村　蒼天（五年）

奨励賞

鵜飼　皐史（五年）

中学生の部

入選

鈴木　那実（一年）　田中のどか（二年）

中嶋　ゆり（二年）　小久保実咲（二年）

渋沢　莉子（二年）　永井　逸晴（一年）

岡田　かほ（一年）

奨励賞

森　菜津美（二年）

令和7年度崋山・史学研究会研修視察
静岡県牧之原市・藤枝市をめぐる

令和7年度崋山・史学研究会研修視察は、十月二十五・二十六日、土日曜日にかけての一泊二日で行われました。今回は、NHK大河ドラマ「べらぼう」で、主役の蔦谷重三郎にからむ田沼意次侯ゆかりの旧相良藩の牧之原市を含む静岡県内の研修としました。

当日、午前九時、田原市博物館の駐車場に集合した会員は、石川洋一・大﨑洋・大﨑南千子・加藤克己・柴田雅芳・鈴木利昌・林宏美の七名です。今回の研修視察ではレンタカーを利用します。

国道23号線バイパスを経由して、静岡県方面を目指します。浜松市で、国道1号線から国道150号線に入り、静岡県内を東進します。最初の目的地は、現在は掛川市にある横須賀藩の居城であった国指定史跡横須賀城跡です。横須賀城は戦国時代末期には、徳川勢力と武田勢力の攻防が続き、江戸時代に入っても、遠州南部の拠点として二十代の城主により治められました。横須賀藩第五代藩主西尾隠岐守忠善（一七六八～一八三一）の娘、於明が田原藩主三宅康直の正室として嫁いでいます。当日周辺では、遠州横須賀街道ちっちゃな文化展が開催されていました。25年続くイベントとのことでした。三の丸大駐車場に車を停めて横須賀城址を徒歩でまわります。北の丸・西の丸・本丸の順にめぐりました。珍しい玉石積み石垣があり、私たちが訪ねた後の十二月に三の丸の発掘調査で、外堀の南東の角から江戸時代末期の玉石積み石垣が発見されました。安政東海大地震で倒壊した石垣を築き直したことが考えられるとのことでした。

昼食を道の駅風のマルシェ御前崎でとり、牧之原市史料館へ向かいます。この館は、相良城本丸跡にあり、牧之原市相良庁舎に隣接しています。企画展「田沼意次の新時代展」と大河ドラマ「べらぼう～蔦重栄華乃夢噺～」展を開催中です。館の玄関前では、蔦谷重三郎役の横浜流星さんのパネルが迎えてくれます。さらに後方には田沼意次銅像も建立されています。意次侯生誕三百年を契機に寄付金を募り、令和三年に完成したものです。館内を学芸員の長谷川倫和さんに、意次侯の遺訓や大河ドラマ出演者のエピソードも交えながら案内していただき、郷土画人で、渡辺崋山の弟子、平井顕斎の作品を見せていただきました。御城印とクリアファイルもいただけました。

次に、田沼意次が再建した平田寺へ向かいます。田沼家専用の玄関を備えています。

次に、大鐘家に向かいます。国指定重要文化財の母屋と長屋門を見学できます。一万坪の敷地には、季節によりあじさいや酔芙蓉の咲く庭園、小堀遠州の作と伝えられる庭や史料館もあり、当主にご案内いただきました。見学後、島田市内にあ

る「ホテルルートイン島田吉田インター」にチェックインし、夕食を取り、旅の疲れを癒します。

第二日目は、藤枝市の蓮華寺池公園内にある藤枝市郷土博物館・文学館を目指します。昭和一〇〇年記念特別展「輝いていた昭和の暮らし展」を見学します。庶民文化研究所町田忍コレクションを紹介するもので、町田さんが子供の頃から収集してきた食品・菓子・飲料・医薬品を中心とした、さまざまな商品パッケージの移り変わりをたどっています。日本一の銭湯資料コレクションや昭和を代表するイベントの大阪万博資料なども展示されています。受付横では、特別展期間中に作成された銭湯背景画や駄菓子販売もされていました。

次に、藤枝市史跡田中城下屋敷を見学します。田中城は、五百年ほど前、地元の豪族一色氏が今川氏の命を受けて屋敷を拡大して城としたのが始まりとされ、その後、武田氏の手に落ちましたが、江戸時代には四万石程度の譜代大名が治めています。城の南東隅にあたる下屋敷は、江戸時代後期には城主の下屋敷（別荘）が置かれ、四季の景色を楽しんだともいわれています。平成八年に下屋敷跡の庭園を復元するとともに、田中城ゆかりの建物である本丸櫓・中間部屋・厩・茶室などがあります。

島田市内に移動し、国指定史跡諏訪原城跡へ向かいます。諏訪原城ビジターセンターの駐車場に入り、城の歴史を学び、ジオラマ模型を見ることができました。すぐ近くに旧東海道菊川坂の復元された石畳もあります。諏訪原城は、天正元年（一五七三）武田信玄が亡くなった年、息子の勝頼が遠江侵攻の拠点として、家臣に命じて築城させましたが、天正三年には、徳川家康によって攻め落とされ、牧野城と改名され、城番が置かれ、曲輪の増設や堀普請などの改修が行われます。天正九年に高天神城（掛川市）が家康に奪還され、翌年に武田氏が滅亡するとこの城の必要性は無くなり、その後、家康が関東に移ったことから、天正十八年頃廃城になったと言われています。昭和五十年に国指定史跡となり、平成二十九年に続日本百名城にも認定されました。

最後に、東海道の難所として知られた小夜の中山峠に寄ります。茶店の扇屋と中山公園入口の西行歌碑を見学し、帰路につきます。博物館駐車場で解散としました。

研究会長　鈴木利昌

公益財団法人崋山会 田原市博物館 からご案内

田原市博物館展覧会のご案内

十月十日(土)～十二月六日(日)

企画展

重文渡辺崋山像保存修理記念

未来へつなぐ、重要文化財渡辺崋山関係資料(企画・特別展示室)

重要文化財渡辺崋山関係資料のうち、椿椿山筆「渡辺崋山像」は経年による傷みが進行していました。本格的な解体修理が必要と判断し、国庫補助を受けて、令和五～六年度にかけて、解体修理が行われました。本展では、「渡辺崋山像」を修理後初公開するとともに、渡辺崋山の優品を紹介します。

渡辺崋山像の修理中の様子

四月十一日(土)～六月七日(日)

描かれた風景

―特別展示 重文 渡辺崋山「四州真景図」と重文 椿椿山「山海奇賞図」―(特別展示室)

「四州真景図」と「山海奇賞図」は、それぞれ渡辺崋山と椿山の代表作として知られています。この二作品とともに、館蔵の風景画作品を紹介します。

※重要文化財の展示は四月二十五日(土)から五月六日(水・祝)まで。

重文 渡辺崋山「四州真景図」(部分)個人蔵

相撲絵展―芝村コレクション―(企画展示室2)

六月十三日(土)～八月二日(日)

ふるさとの歴史 [挿絵画家 宮川春汀]ほか(企画展示室1)

八月八日(土)～十月四日(日)

テーマ展 没後五十年 郷土の書聖 鈴木翠軒(企画展示室一)

没後五十年にあたる本展では館蔵品を中心に、翠軒芸術の世界をご堪能いただきたいと思います。

【画像】鈴木翠軒と万葉歌碑

【渡辺崋山の生涯と作品】

常設展示室では、渡辺崋山の生涯を常時紹介しています。また、特別展示室では崋山やその弟子等の作品を随時入れ替えながら展示しています。

※常設展示室、特別展示室は六月八日から十月九日まで空調設備改修工事のため閉室します。その期間中は、企画展示室2にて崋山の生涯を紹介します。

観覧料

企画展 未来へつなぐ、重要文化財渡辺崋山関係資料

一般	五〇〇円(四〇〇円)
小中学生	二五〇円(二〇〇円)

企画展以外

一般	三一〇円(二四〇円)
小中学生	一五〇円(一二〇円)

( )内は二十人以上の団体料金

東三河在住の小中学生は、ほの国こどもパスポートの提示で観覧無料。

休館

毎週月曜日(祝日の場合はその平翌日)、展示替日、十二月二十八日～一月四日

(公財)崋山会から

講座「渡辺崋山を知るために」

毎月十一日午前九時から

崋山・史学研究会会員募集中

毎月第四土曜日研究会

視察研修(年一回)に参加できます。

渡辺崋山史学巡りガイド養成講座

毎月一回程度

申込場所 崋山会館事務室

崋山会報 第五六号
令和八年四月十一日発行
編集発行 公益財団法人崋山会
理事長 林 勇夫
常務理事 讃岐俊宣
〒四四一―三四二一
愛知県田原市田原町巴江一二の一
TEL〇五三一・二二・一七〇〇
FAX〇五三一・二二・一七〇一

編集協力
田原市博物館
崋山・史学研究会
会長 鈴木利昌

※崋山会報ご希望の方は崋山会館・田原市博物館にお申し出ください。

次回発行予定 令和八年十一月十一日